

深い学びにつながる高校国語の授業づくり

— 言葉による見方・考え方を働かせ、知識の関連付けを意識した授業を通して —

西山 貴 義¹

生徒たちがこれからの時代を生きていく上で必要とされる資質・能力を育むために、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が求められている。本研究は「深い学び」の実現につながるため、言葉に着目し想像力を養うことのできる俳句を通して、言葉による見方・考え方を働かせ、知識の関連付けを意識した授業を実践した。その結果、多くの生徒に言葉への自覚の高まりが見られ、一定の効果が確認された。

はじめに

高等学校における次期学習指導要領が平成30年3月に告示され、これからの時代を生きる生徒たちの学習の在り方が示された。

所属校の生徒は、様々な課題を抱えながら、日常生活を送っている。そのため、所属校の教職員は、一人ひとりの実態に合わせ、生徒が社会でよりよく生きていくためには何が必要かを考えながら、日々教育活動を行っている。しかし、どのような「資質・能力」を、どのように育成していけばよいのかを試行錯誤している状況である。その中で、所属校では、授業改善の委員会を設置し、その取組を中心に、社会で生きて働く知識を身に付けさせる授業の実践と検討を続けている。

育成を目指す「資質・能力」については、中央教育審議会が「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(以下、「答申」という)において、育成を目指す資質・能力の三つの柱として、「何を理解しているか、何ができるか」、「理解していること・できることをどう使うか」、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」(中央教育審議会 2016 pp. 28 - 31)と示している。

また、『高等学校学習指導要領解説総則編』では、「生徒に目指す資質・能力を育むために『主体的な学び』、『対話的な学び』、『深い学び』の視点で、授業改善を進めるものであること」(文部科学省 2018a p. 4)と、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の必要性について述べている。

このことから、本研究の目的を次のように設定した。

研究の目的

- 1 神奈川県立小田原高等学校 定時制
研究分野(授業改善推進研究 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に関する研究・国語)

本研究の目的は、言葉による見方・考え方を働かせ、知識の関連付けを意識した国語の授業を実践し、生徒の学びに対する意識の変容を見取ることを通して、「深い学び」につながる授業実践の一例を示すことである。

研究の内容

1 研究の背景

(1) 所属校の現状

所属校では、欠席が多くなりがちな生徒や学習の目的を意識して取り組めていない生徒が多く、単元を通じた授業展開を意識してはいるものの、生徒の実態に合わせ、一話完結型の授業展開になりやすい。そのため、知識の定着や習得した知識を今後の生活にいかしていこうとする姿勢の育成が課題として挙げられる。所属校の教育目標にも「基礎的・基本的な知識・技能を着実に身に付けるとともに、自ら学ぼうとする態度、互いに学び合おうとする態度を持った生徒を育成する」とあり、所属校の教職員は、生徒が社会でよりよく生きていくために、日々の授業改善に取り組んでいる。

(2) 「主体的・対話的で深い学び」

「答申」では、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の三つの視点について、「子供の学びの過程としては一体として実現されるものであり、また、それぞれ相互に影響し合うものでもあるが、学びの本質として重要な点を異なる側面から捉えたものであり、授業改善の視点としてはそれぞれ固有の視点である」(中央教育審議会 2016 p. 50)としている。これまで所属校において、「主体的・対話的で深い学び」についての意見交換を行う中で、「深い学び」のイメージがつかみにくいという意見が多くあった。そこで、本研究では「深い学び」に着目した。

(3) 「見方・考え方」

『高等学校学習指導要領解説総則編』では、「深い学びの鍵として『見方・考え方』を働かせることが重要になる」(文部科学省 2018a p. 4)としている。そして、『高等学校学習指導要領解説国語編』では、国語科における「見方・考え方」は「言葉による見方・

考え方」であり、「対象と言葉，言葉と言葉との関係を，言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉えたり問い直したりして，言葉への自覚を高めることであると考えられる」（文部科学省 2018b）と示している。

2 本研究における「深い学び」

(1) 「言葉による見方・考え方を働かせる」

先ほど述べたように、『高等学校学習指導要領解説 国語編』では「言葉による見方・考え方を働かせること」を「言葉への自覚を高めること」と示している。本研究では、「言葉への自覚を高めること」を、「言葉に着目して吟味すること」と「言葉を用いて考えを形成すること」と捉えた。そして、学校の学びと実生活を結び付けることが、国語の授業における「深い学び」を促し、実社会・実生活で生きて働く汎用的な言語能力の育成につながると考えた。本研究では、言葉により着目するために、教材を俳句に設定した。

(2) 「知識を相互に関連付ける」

「答申」では「深い学び」について、「知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう」（中央教育審議会 2016 p. 50）学びと示している。本研究では、その中で所属校の課題にもつながる「知識を相互に関連付けてより深く理解すること」に着目した。

田村は「知識・技能」について、「各教科等で習得する『知識・技能』が相互に関連付けられ、社会の中で生きて働くものとして形成されるようにすることが大切である」（田村 2018 p. 36）と述べている。本研究では、「知識を相互に関連付けること」を、「習得した知識が相互に組み合わせたり、実生活の中で活用できること」と捉えた。そのために、今回の検証授業では、習得した知識が様々な場面や状況とつながっていると実感できる場面を設けた。

(3) 「深い学び」

所属校では、自分の考えや思いを言葉で表現することが苦手な生徒が多いため、どのような場面でも自分の考えや思いを伝えられるように、育成を目指す資質・能力を「汎用的な言語能力」とした。本研究は、「言葉による見方・考え方」を働かせ、「知識の習得と関連付け」を通して「汎用的な言語能力」の育成を目指す学習の過程を「深い学び」として捉えた。

3 研究の仮説

本研究における研究仮説は次の通りである。

言葉による見方・考え方を働かせ、知識の関連付けを意識した国語の授業を实践することは、深い学びにつながり、実社会・実生活で生きて働く汎用的な言語能力の育成に有効である。

4 生徒の思考と振り返りの手立て

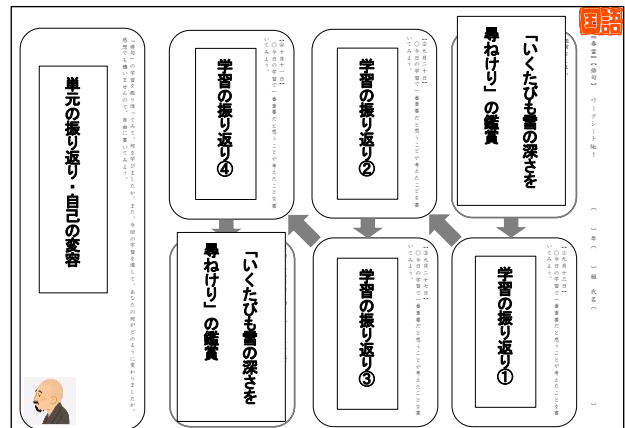
(1) ウェビングマップ

ウェビングマップとは、「中心にトピックやテーマを置き、それに関連するものを連想して広げていく」思考ツールで、「思考を拡散させ、関連付けて考える時に有効」とされている（田村 2018 p. 77）。所属校には、自分の考えを広げたり、表現したりすることが苦手な生徒も多いため、今回の検証授業では、俳句の鑑賞を行う際にウェビングマップを用いて、イメージを自由に連想させ、思考の過程を可視化してから表現させることとした。

(2) 定型的な学習ツール

ア 一枚ポートフォリオ

堀は、「教師のねらいとする授業の成果を、学習者が一枚の用紙（OPPシート）の中に授業前・中・後の学習履歴として記録し、その全体を学習者自身に自己評価させる方法」（堀 2013）として「一枚ポートフォリオ」を開発し、それを用いた実践を行っている。本研究では、一枚ポートフォリオを用い、学習の振り返りと自己の変容に気付かせるようにした（第1図）。



第1図 一枚ポートフォリオ

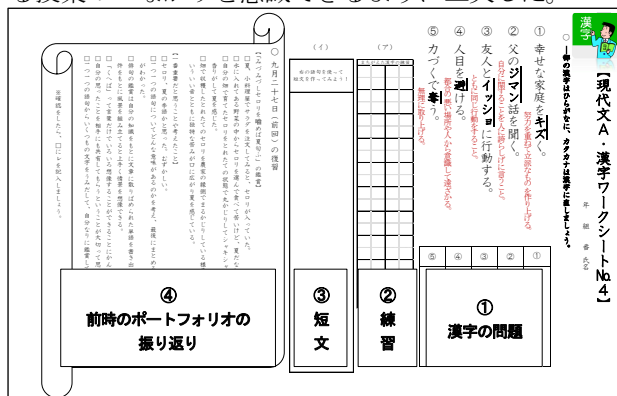
今回は、正岡子規の「いくたびも雪の深さを尋ねけり」を用いて、検証授業の最初と最後における鑑賞や、毎時間の最後に学習の振り返りを記入させた。そして、最後に単元を通して学んだことや自分がどのように変容したかをまとめさせることで、単元の振り返りを一枚の用紙で視覚的に確認できるようにした。

イ ワークシートの工夫

毎時間の開始10分間を用いて、ワークシートに取り組ませることで、言葉の働きや使い方についての学習と、前回の授業の振り返りを行った。内容は、初めに漢字の問題（第2図①）、その後、漢字の練習（第2図②）とその語句を用いた短文作成に取り組ませ（第2図③）、最後に生徒が記入した一枚ポートフォリオの振り返りから抜粋したもの（第2図④）を読ませることで、前時の振り返りを行わせた。

今回の検証授業では学習履歴として一枚ポートフォリオを用いるため、前時に授業を受けなかった生徒にも分かるように振り返りは丁寧に実施し、単元におけ

る授業のつながりを意識できるように工夫した。



第2図 ワークシート

5 検証授業

(1) 検証授業の概要

【実施期間】平成30年9月13日(木)～10月11日(木)

【対象】小田原高等学校校定時制第2学年1クラス
(20名)

【単元名】「春雷」～俳句の鑑賞をしよう！～

【授業数】8時間

(2) 各時間の授業内容

ア 第1・2時

この時間のねらいは、言葉に興味を持ち、言葉を吟味することとした。学習を始めるに当たり、第1時に単元の目標を共有し、学習の見通しを持たせる時間を設けた。授業では、一枚ポートフォリオを用いて俳句の鑑賞を行い、その後、「やばい」を用いた短文作成と、松尾芭蕉の「古池や蛙飛びこむ水のおと」の「や」に着目させた。俳句の鑑賞は、正岡子規の「いくたびも雪の深さを尋ねけり」の句で行い、短文作成では、生徒の身近にある「やばい」という言葉を取り上げ、普段の生活でどれほど意識して用いているかを気付かせた。また、「古池や蛙飛びこむ水のおと」の「や」については、切れ字の効果と「や」を「に」に置き換えた場合の印象の違いについてまとめさせた。

イ 第3・4時

この時間のねらいは、言葉を吟味し、知識を活用することと、俳句の批評を通して鑑賞における視点を身に付けることとした。授業では、既存の句を用いた上五・下五の創作と映像を用いた俳句の批評を行った。創作では、生徒が日常生活で目にする多くの、民間企業主催の新俳句大賞の句を用いた。上五もしくは下五を隠して、残りの十二文字から連想させ創作させた。批評については、俳句の創作と批評を行っている民放番組を視聴し、他者の批評を聞くことで、俳句を身近に感じさせるとともに批評の視点を身に付けさせるきっかけとした。

ウ 第5・6時

この時間のねらいは、言葉に着目し、考えの過程を可視化してから表現することとした。授業では、ウエ

ビングマップを用いた俳句の鑑賞を行った。まず、正岡子規の「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」を用い、クラス全体でウエビングマップを活用した鑑賞を行い、その後、日野草城の「みづみづしセロリを噛めば夏匂ふ」の鑑賞をグループで協力して取り組んだ。初めにクラス全体で行い、その後グループで行うことで、ウエビングマップを用いた鑑賞に対して取り組みやすくなるように工夫した。また、ウエビングマップを作成する際には、生徒たちがイメージを自由に膨らませることができるよう留意した。

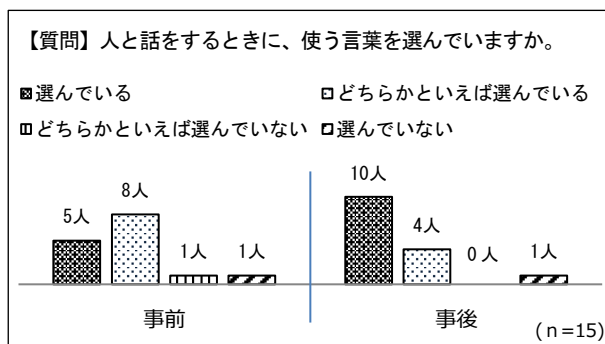
エ 第7・8時

この時間のねらいは、言葉に着目し、考えの過程を可視化してから表現することと、他者との意見交換を通して、自己の考えを深めることとした。授業では、ウエビングマップを用いた俳句の鑑賞とグループでの発表を行った。まず、全体を三つのグループに分け、グループごとに正岡子規の「春の月簾の外にかゝりけり」、「柿の花土塀の上にこぼれけり」、「いさましく別れてのちの秋の暮」、「山里や雪積む下の水の音」の中から一句を選択して、個人で鑑賞を行わせた。その後、グループで各自の鑑賞についての発表を行い、他者と意見交換を行った後、意見交換の内容をクラス全体に向けて発表した。発表の際には、発表の内容のみならず、グループの中で司会や書記などの役割分担も決めさせ、全員で取り組めるように留意した。そして、単元終了時に、この単元で学んだことや自己の変容に気が付くことができるように、振り返りの時間を設けた。

6 検証結果

(1) 言葉に着目して吟味すること・言葉を用いて考えを形成すること

質問紙(4件法)による調査において、「人と話をするとき、使う言葉を選んでいきますか。」の質問項目に対し、「選んでいる」と回答した生徒が5人(事前調査)から10人(事後調査)に増加した(第3図)。



第3図 人と話をするとき、使う言葉を選んでいるか

以下の記述にある生徒A・生徒Bは、第3図の質問項目において、事後調査で「選んでいる」と回答し、事前調査と比べ肯定的な意見に変容した生徒である。「『やばい』という言葉の曖昧さ」や「言葉は難しい」、「相手のことを考えながら話したり、説明したりする

ことが大切」という記述から、授業を通して言葉に着目して吟味することの大切さに気付いたことが見て取れる。特に「やばい」を用いた短文作成においては、生徒の身近にある言葉でもあり、「やばい」の意味や使い方に着目する姿勢が見られた。また、生徒Cの「言葉はよく考えて使うことが重要だと思った」という記述からも、言葉に着目して吟味することを今後の生活につなげていこうという意識を感じることができた。

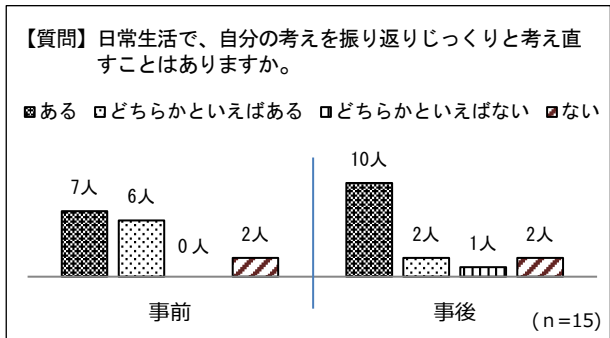
(生徒A 一枚ポートフォリオの記述)
「やばい」という言葉の曖昧さを感じた。

(生徒B 一枚ポートフォリオの記述)
言葉は難しいと松尾芭蕉の句から実感しました。相手のことを考えながら話したり、説明したりすることが大切だと思った。

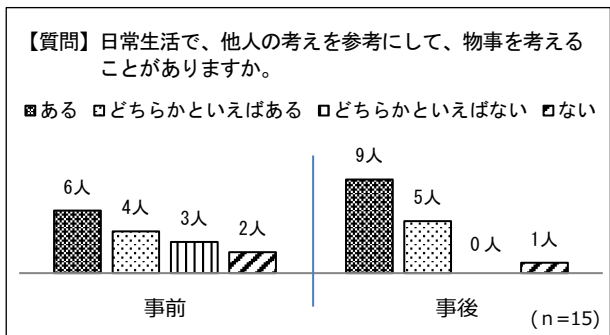
(生徒C 一枚ポートフォリオの記述)
 言葉には複数の異なる意味を持つものがあり、感じる内容は人それぞれだということが分かった。使い方によっては間違った意味で伝えてしまったり、一部の言葉ばかりに頼って他の言葉を忘れてしまったりすることもあるので、言葉はよく考えて使うことが重要だと思った。

※下線は筆者。以下同じ。

「日常生活で、自分の考えを振り返りじっくりと考え直すことはありますか。」の質問と、「日常生活で、他人の考えを参考にして、物事を考えることがありますか。」の質問においても、「ある」と回答した生徒数の増加が見られた(第4図・第5図)。

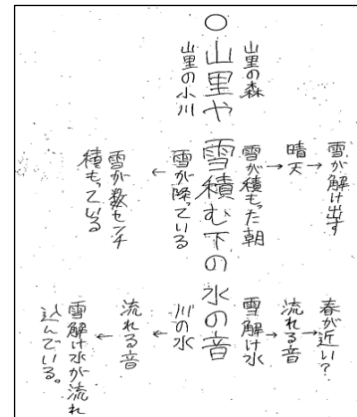


第4図 自分の考えを振り返りじっくりと考え直すことがあるか



第5図 他人の考えを参考にして、物事を考えることがあるか

自分の考えを振り返ったり、他人の考えと比較したりするには、言葉を用いて論理的に思考することが必要になると考えられる。「ある」と答えた生徒が増えたことは、言葉を用いて考えを形成するきっかけになったと捉えることができる。



第6図 ウェビングマップ

また、第6図は生徒Cが作成したウェビングマップである。言葉の派生数には個人差があったが、自身の経験や知識からイメージすることができていて、通常の学習よりは深い読みができていたと思われる。さらに、考えの過程を可視化しているため、発表の際にも相手に伝えやすいという効果があった。考えの過程の可視化が、言葉を用いた考えの形成に効果的であることは、以下の記述からも見て取ることができる。

(生徒B 一枚ポートフォリオの記述)
言葉の一つ一つから、想像したり、細かく分析したりする仕方を学んだことで、文を読み取る力が成長したと思います。

(生徒D 一枚ポートフォリオの記述)
この授業が始まったころは自分の考えを表現することが難しく苦戦していたけれど、この授業を通して、そんなに難しく考えずに、言葉にしてみてもとめるだけでも良いのだと感じました。

さらに、検証授業の最初と最後に一枚ポートフォリオを用いて「いくたびも雪の深さを尋ねけり」の鑑賞を行った結果、以下のような変容が見て取れた。

(生徒E 鑑賞の変容)

今年初の雪なのだろうか。久々の雪で興奮しているのか、何度も何度も尋ねている。もしか、大雪で、家がつぶれないか心配しているのかも。

↓

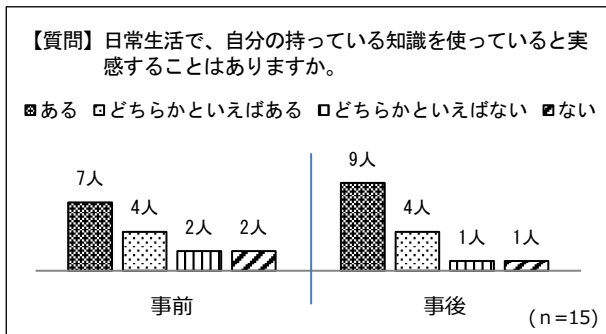
11月、今年度初の雪が降ってきた。今すぐにも見に行きたいのだが、自分はとても動けるような体調ではない。そこで、看病してくれている家内に外の様子を聞いてみるのだが、つつい気になって何度も何度も聞いてしまっている。何度も聞くということは、自分では見ることができないのかも。

生徒Eにおいては最初と比べると、「11月」、「自分は動ける状態ではない」、「家内に聞く」といったストーリーが出来上がっていて、イメージを膨らませ

て鑑賞することができていた。また、その他の生徒においても、箇条書きや単語でしか書けなかった生徒が、最後には文章で書こうという意識が見られるなどの変容を見取ることができ、生徒たちが言葉に着目して、言葉を用いて自分の考えを表現しようとする姿を見ることができた。さらに、一枚ポートフォリオに学習の履歴をまとめることで、自己の変容に気付けた生徒が多いことも見て取れた。

(2) 習得した知識が相互に組み合わさり、実生活の中で活用できること

「日常生活で、自分の持っている知識を使っていると実感することはありますか。」の質問においても、「ある」と回答した生徒の増加を見ることができた(第7図)。「深い学び」につなげるためには、知識の習得だけにとどめず、社会の中で活用できるように促すことが重要になると考えられる。第7図の質問において、肯定的な回答に変容した生徒がいたことは、自分が持っている知識を活用しようという意識の変容があったことを示している。それは以下にある、生徒Bの「ウェビングマップを活用していきたい」や、生徒Cの「自分の知識を基に」、生徒Dの「自分の知識と照らし合わせてみる」という記述からも見て取れる。



第7図 自分の持っている知識を使っていると実感することがあるか

(生徒B 一枚ポートフォリオの記述)

単語一つ一つに分けて、細かく分析することが良いと思いました。今後、ウェビングマップを活用していきたいです。

(生徒C 一枚ポートフォリオの記述)

俳句の鑑賞は、自分の知識を基に文章に散りばめられた単語を書き出し、「いつ」「どこで」などの条件をもとに風景を組み立てると上手く情景を想像できる。

(生徒D 一枚ポートフォリオの記述)

俳句での一つ一つの単語や言い回しについて、自分の知識と照らし合わせてみることで新しい発見がありました。

さらに、単元終了時のまとめには、次のような記述も見られた。生徒Fにおいて、最初一枚ポートフォリオの振り返りでは「俳句は言葉選びが一番重要だ」

と、俳句の創作や批評について学んだことを書いていたが、最後のまとめでは「相手にも分かりやすく言葉を選んで話すことが大事だ」とあり、検証授業を通して、言葉を実生活と結び付けて考え、活用していこうという姿勢に変容したことが見て取れる。

(生徒F 一枚ポートフォリオの記述)

俳句は言葉選びが一番重要だとしました。誰が読んでも想像できる詩を書くの良いということも分かりました。



言葉は選ぶことが大事だと学べた気がします。話したいことを自分の思うように話しても、相手には伝わっていないことがきっと多いはずだから、相手にも分かりやすく言葉を選んで話すことが大事だということを改めて学べたと思います。

7 考察

(1) 「深い学び」につなげることができたか

検証結果では、「言葉に着目して吟味すること(第3図、生徒の記述)」、「言葉を用いて考えを形成すること(第4・5・6図、生徒の記述)」、「習得した知識が相互に組み合わさり、実生活の中で活用できること(第7図、生徒の記述)」がおおむね達成され、「汎用的な言語能力」が育成できたことを示している。

これらのことから、言葉による見方・考え方を働かせ、知識の関連付けを意識した国語の授業を実践することが、「深い学び」につながっていると考えられる。

(2) 定型的な学習ツールについて

今回の検証授業では、前時の振り返りを第2図のワークシートを用いて、各授業の最初に行った。これは前時に授業を受けなかった生徒が、前時の内容を理解し、本時の授業に取り組みやすくなるための工夫でもある。今回は漢字の問題や短文作成と合わせて10分間で設定し、各自で確認するように促し、質問があれば対応する形をとった。そのため、ほとんどの生徒は一枚ポートフォリオを作成することができ、意欲の向上につながられたと考えられる。

研究のまとめ

1 研究の成果

これまで述べてきたことにより、言葉による見方・考え方を働かせ、知識の関連付けを意識した授業を通して、「深い学び」につながる授業実践の一例を示すことができたと考える。

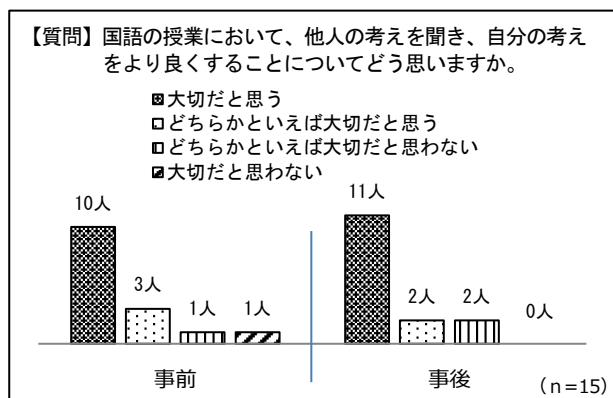
今回扱った俳句は、より言葉に着目しやすい教材であった。しかし、言葉に着目することができる教材は俳句だけではない。今回の検証授業では、ウェビングマップや一枚ポートフォリオなどの思考ツールや定型的な学習ツールを用いて、言葉への自覚を高め、学校

の学びと実生活をつなげることをねらいとした。このような本研究の着眼点と手法は、様々な状況にある生徒一人ひとりを「深い学び」に導くことに一定の有効性を持つと判断される。

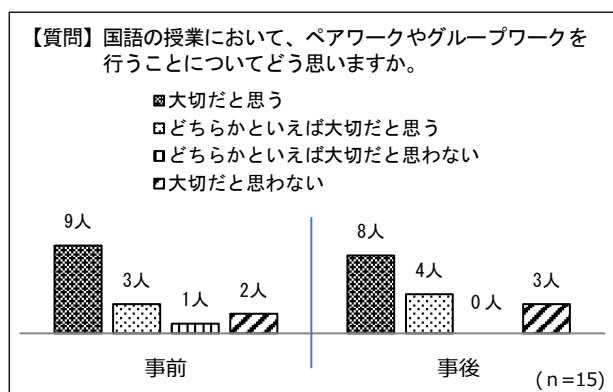
2 課題と今後の展望

(1) 「グループワーク」へのハードル

今回の検証授業で、個人作業のときには自分の意見をワークシートに書いていたが、グループワークになると「自分はまだできていないから」と言い、自分が書いていた内容を消している生徒がいた。



第8図 国語の授業において、他人の考えを聞くことについてどう思うか



第9図 国語の授業において、ペアワークやグループワークを行うことについてどう思うか

さらに、上記の回答からも分かるように、他者の意見を聞くことについての重要性は理解しながらも、他者とのコミュニケーションには抵抗のある生徒がいるのも事実である(第8図・第9図)。そのため、生徒の現状をよく理解した上で、グループワークなどの形式にこだわらず、他者と意見を共有し、自分の考えを深められる手立てを検討していく必要があると考える。

(2) 深い学びに向けての継続的な取組

ア 欠席が多くなりがちな生徒へのアプローチ

検証授業後の生徒は、言葉への自覚が高まり、学習の目的を意識して取り組んできてはいるものの、欠席をしてしまうことで、授業のつながりを十分に意識できていない現状にある。「深い学び」は一回の授業や、

一つの教科のみで実現するものではないと考えられるので、学習内容を自らの生活とつなげ学び続けるために、欠席が多くなりがちな生徒への理解とアプローチが必要になってくると考えられる。

イ 指導内容の吟味

今回の検証授業では、「やばい」の短文作成のように生徒の身近にある言葉を用いることで、生徒が意欲的に取り組んだ場面もあれば、「句またがり」など学習内容の難易度が高く、生徒の思考が深まらなかった場面もあった。そのため、深い学びにつなげるためには、生徒の現状に応じた単元や学習内容の設定が必要だと強く感じた。

おわりに

本研究は、「深い学び」につながる授業改善の実践例の一つとして示したものである。生徒が資質・能力を身に付け、社会でよりよく生きていくために、今後も生徒理解に努め、授業改善に取り組んでいきたい。

最後に、研究に御協力いただいた小田原高等学校定時制の皆様から感謝を申し上げる。

引用文献

中央教育審議会 2016 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf (2018年12月取得)

文部科学省 2018b 『高等学校学習指導要領解説国語編』
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/13/1407073_02.pdf (2018年12月取得) p. 22

文部科学省 2018a 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説総則編』 東洋館出版社

田村学 2018 『深い学び』 東洋館出版社

堀哲夫 2013 『教育評価の本質を問う 一枚ポートフォリオ評価OPPA 一枚の用紙の可能性』 東洋館出版社 pp. 20-21

参考文献

「読み」の授業研究会編 2018 『国語の授業で「深い学び」をどう実現していくか - 「言葉による見方・考え方」の解明と教材研究の深化』 学文社

大滝一登・幸田国広 2016 『変わる! 高校国語の新しい理論と実践 - 「資質・能力」の確実な育成をめざして』 大修館書店

高木展郎・大滝一登 2016 『アクティブ・ラーニングを取り入れた授業づくり - 高校国語の授業改革 -』 明治書院